

2025年11月23日降臨節前主日

エレミヤ書 23章 1-6節

コロサイの信徒への手紙 1章 11-20節

ルカによる福音書 23章 33-45節

昨日は、第147教区会がありました。東京教区と北関東教区の合併の議案が可決され、明日の北関東教区の決議を経て、いよいよ東日本教区の歩みが始まります。複数の教区が共に歩み始めることは、日本聖公会が始まって以来の初めてのことです。数年後には、他教区でも同じ歩みが始まると思います。その出来事の意味は、のちの歴史が決めることではありますが、現時点でも2025年は、日本聖公会の新しい宣教の形が始まった年であったといえるでしょう。

本日は、始まりと終わりという意味では、聖霊降臨後の節の最終主日です。来週の11月30日は降臨節第1主日ですから、新しい教会歴が始まります。福音書は、従来の日課では、イエス様の十字架の物語（ルカ 23：35-43）とエルサレム入城（ルカ 19：29-38）の選択でしたが、新しい聖書日課では、23章 33-45節のイエス様の十字架の物語のみとなっています。それ故、ここでは聖霊降臨後の節で見続けてきたイエス様の物語の最後としてその十字架の姿から学びたいと思います。

物語は極めて分かりやすい構造を持っています。イエス様が十字架に架けられたとき、二人の人が一緒に十字架に架けられ、「**ほかに、二人の犯罪人がイエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った**」（ルカ 23：32）とある通り、二人は、死刑に相当する罪を犯した犯罪人でした。しかし、死という最後を迎えようとする二人のうち、ひとり、悔い改め、もうひとは、最後までイエス様をののしったのでした。悔い改めというテーマを、物語全体を通して強調するルカ福音書において、究極の悔い改めのシーンといえるでしょう。そして、悔い改めた人の言葉、「**イエスよ、あなたが御国へ行かれるときには、私を思い出してください**」（ルカ 23：42）は、信仰者にとって尊い言葉として受け継がれていると思います。

一緒に十字架につけられた二人に注目しましたが、それ以外の人々も人間の様々な姿を示しています。「**民衆は立って見つめていた**」（ルカ 23：35）という短い表現がありますが、そこには民衆の無力な傍観者である姿、あるいは奇跡的な何かを期待するような信仰心を持つ姿が示されています。イエス様を十字架につけるように画策した人々は、「**議員たちも、嘲笑って言った。**

『**他人を救ったのだ。神のメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。**』

（ルカ 23：35）とののしります。その言葉には、イスラエルを軍事的、政治的に救うのがメシアである。自分すら救えない人物がメシアであるはずがないという価値観が現れています。逆に言えば、彼らの救いとは自分たちをこの世的に救うことなのです。兵士たちの姿も、「**お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ**」（ルカ 23：37）とののしります。イエス様の時代は、王を含めて軍事的指導者は、自分自ら先頭に立って戦う強さが求められます。十

十字架上で無力であるイエス様の姿は、彼らの概念の「王」という称号には合わないのです。以前の聖書日課にあった、王としてのエルサレム入城（ルカ 19：29-38）は、イエス様が兵士たちの期待するような王ではないことを群衆に示すお話であったのですが、十字架につけた兵士たちは、最後までそのような「王」の概念を理解できないのでした。

そのような中で、イエス様と一緒に十字架に架けられた一人の「**イエスよ、あなたが御国へ行かれるときには、私を思い出してください**」（ルカ 23：42）という言葉は、罪を犯した自分たちとは異なり、何の罪も犯していないイエス様が十字架につけられている意味を、漠然とであっても理解し、それだけではなく自分の罪をも自覚し、その結果である十字架刑とその死を受け入れ、それでも、もし許されるのならということを示しています。そして、そうであるからこそ、イエス様は「**よく言うておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる**」語るのです。ここにある「いる」は、未来形です。未来に起こることへの推測の意味もありますが、起こることの確実性も示します。「今日」とも言っていますので確実性です。悔い改めた人は、すでにその言葉を語った時にイエス様とともにいるのでした。

本日の福音書のテーマは、悔い改めとそれに対する赦しです。しかし、大切なのは、何故悔い改めが必要かということです。第一は、主なる神様に創られた人間が、神様の方を向かない、神様を中心とした生活をしないためです。しかし、本日の福音書が示していることは、人間が単に神様から離れただけではなく、「自分を救う」ことを大切にする生活をしてしまうからです。

自分自身を救うこと、自分を危険から守ること、これは当たり前のことです。それはそれで大切です。また、そのことは簡単には否定できないと思います。しかし、イエス様の十字架が示すのは、そこに大きな罪へと発展するはじまりがあるということです。この世界で人を傷つけることを喜びとする人はほとんどいないと思います。しかし、「自分を救うこと」「自分の愛する何かを救うこと」、それが善、正義、平和、秩序の維持など、様々な名目の下に拡大解釈されるとき、人を傷つけることも正当化される場合があるのです。わたしたちは、イエス様を十字架に架けるように画策するような歩みはしないでしょ。しかし、同時に、イエス様と同じように歩むことも困難でしょう。その意味では、常に、「立って見つめている」ことが多いのかもしれない。しかし、だからこそ、わたしたちは、自分たちが何を求めるべきかを、共に集められる礼拝の中で学ぶことが大切なのです。

最初に教区合同の話をしていました。教区の合同とは、ひとつの教区の死などと表現するととても大袈裟になってしまいましたが、東京教区がそのままであることを保持し、東京教区だけの発展を願っていたとするならば、合同など可決することはなかったと思います。未来はわたしたちにはわかりません。しかし、自分だけではなく、誰かと歩むことを選択することから、イエス様から「**よく言うておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる**」と言っただけの歩みが始まるのだと思います。